

2004年度から2005年度の報告

矢野智司

『臨床教育人間学』第7号の出版が、2004年度4月より始まった国立大学法人化の混乱から大幅に遅れてしまった。この間の臨床教育学講座に関連した出来事を簡単に報告しておきたい。

まず2004年より以前のことになるが、2003年12月より、齋藤直子助教授が東京大学から臨床教育学講座の助教授として着任した。齋藤先生の専門は英米の教育哲学で、デューイ、エマーソン、カベルらの教育思想の研究を進め、新たな教育人間学の可能性を模索している。その研究成果の一部は今年夏 Fordham University Press から *The Gleam of Light: Moral Perfectionism and Education in Dewey and Emerson* として出版されている。

2004年4月より、皆藤章助教授が新しくできた臨床実践講座の助教授として転任された。講座にとっては大きな痛手ではあるが、引き続き学生の教育と研究において協力関係が維持されており、臨床心理学の持つ臨床への緊張に満ちたそして人間への深い理解へと開かれたアプローチを、院生・学生に伝達する機会をもつことができている。

同じく5月には、イギリス教育哲学の中心的研究者の一人 P. スタンディッシュ教授が、齋藤先生との共同研究の関係で来日され、大学院のゼミに参加された。現代思想をもとにクリアカットに教育思想を論じるスタンディッシュ先生の議論に、若い院生たちが果敢に論争を挑むゼミは成果の多いものとなった。

今年2005年3月、中桐万里子『方法としての〈語り〉——報徳言説という語態』と河野洋子『宗教教育の臨床教育学的可能性——『パンセ』における『考える葦』のレトリック論的解釈』のタイトルで、ともに臨床教育講座として初めての課程博士を取得した。皇先生と皆藤先生の両先生による熱心な指導のたまものである。こうして臨床教育学という学問の基本的な形の一つを作ることができたといえよう。

教育哲学学会の学会誌『教育哲学研究』では、中桐万里子「二宮尊徳の〈方法〉としてのことば——『三才報徳金毛録』という語り」(89号)、河野洋子「宗教教育のトポスを開く語りの可能性——『パンセ』の『自然な文体』を手がかりとして」(89号)、山内清郎「フモリス

ト的覚醒的教師としてのキルケゴール——仮名著者ヨハンネス・クリマクスの語りから」(90号)、井谷信彦「教育との連関における気分の哲学的『発見』——M.ハイデガー『存在と時間』以前のバトス解釈」(91号)の論文が、連続して掲載されている。また関西教育学会の学会誌『関西教育学会研究紀要』の第5号に、宮崎康子「『内的体験』における『外』の語り——G.バタイユの不可能なもの語りと読みの位相」が掲載されている。このように臨床教育学講座の院生や出身者が学会で活躍し、臨床教育学・教育人間学の研究成果が教育哲学研究においても認められていることを嬉しく思っている。

本研究誌はこのような若い研究者の道場であり、貴重な発表の場である。この号では中桐さん・河野さんそれぞれの課程博士論文の一部を掲載することができた。